

第 24 回 研 究 会 参 加 記

— 大 雪 地 区 畜 産 基 地 を 訪 ね て —

酪農学園大学 西 埜 進

昭和53年9月6・7日の2日間。現地研究会が上川町の肉用牛生産基地で「アバディーンアンガス種の繁殖と肥育」という課題で開催された。この時期は、「米国が牛肉とオレンジを中心とした大巾な輸入量の増加を要求してきたが、この要求をのめば我が国の農家が大打撃を受ける」として中川農相が日米農産物交渉のため渡米していた頃であった。このように我が国の農業を取り巻く世界状況が厳しい時に今回の現地研究会がもたれたことは、肉用牛生産専門経営の成立条件を改めて問い直す上に極めて重要な意義を持ち、かつ時宜を得たものであった。

本道において肉用牛の生産振興が叫ばれてから、既に20有余年は経過した。この間における国あるいは道の生産振興の諸施策は、肉用牛の飼養頭数の増加のみに向けられ、肉用牛経営をその生産部門を通じて発展向上せしめる基本的命題が欠如していたきらいがあった。従って、現在に至っても肉用牛飼養農家の改廃が常に顕著に現われている。確かに肉用牛の飼養は、その性格からいって長期的傾向を持つものではあるが、何時も新しい肉用牛飼養農家が主体とならざるを得ない側面が一方にはあった。

このような北海道の全体的動向から、今後の肉用牛経営の安定的発展にとって、何がどのように解決されねばならないのか、ということは極めて重要な課題と言える。

9月6日午後1時旭川駅前集合し、バスに乗り込み、国道39号線を一路北進し、目的地の上川町に向った。旭川駅を出発して間もなく車内において、肉用牛生産基地の概要について農用地開発公団の進藤課長から説明を受けた。その説明によると「肉用牛の大型経営群の創設・育成、公共牧場の設置及び林間放牧地の整備を図り、その地域を畜産物（牛肉）の濃密生産団地とする。その生産システムは、個別経営13戸が繁殖（子とり）と育成を行ない、公共施設（肥育センター）1カ所が肥育部門を遂行する飼養分業の形態をとった。個別経営13戸は、菊水団地5戸、旭ヶ丘団地4戸、下高台団地2戸及び越路団地2戸の4団地に分散し、肥育センターの施設は現在建設中」とのことであった。そのほか畜舎とサイロについても熱心な説明がなされた。

以上が進藤課長の説明であり約30分程で終わったが、車内の40数名は終始耳を傾けていた様子。

バスに揺られ、車窓から沿線の景色を眺めながら、ひとつは、従来から肉用牛飼養は、子牛生産・育成及び肥育に分離され、地域内あるいは地域間分業という形で発展してきたが、なかでも子牛生産経営の安定化には残された課題が多いと言われていた。もうひとつは、確かに外国専用種は、粗飼料の利用性とか、早熟性あるいは飼い易さという点では優っているだろう。しかし、道内の肉用牛の大半は黒毛和種であり、肥育牛市場の立ち遅れも当然あるのにもかかわらず、なぜアバディーンアンガス種を導入したのか、という先行きに不安な思いが感じられた。

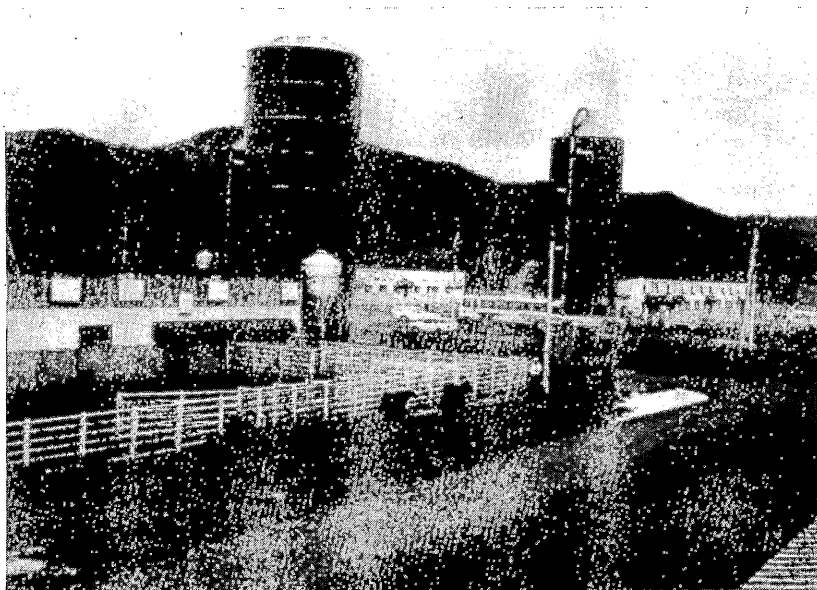
バスが旭川駅を出発してから目的地の菊水団地に到着したのは約2時間後であった。菊水団地は、上川駅より南東約4キロの国道39号線沿いの所に位置し、地形は緩傾斜丘陵地であり、その標高は、

375メートルあるという。しかも畜舎周辺には平坦地が極めて少なかった。

上川町の畜産は乳牛と豚が主体であったのが、昭和50年からは畜産基地建設事業による肉用牛導入があって、基幹家畜が乳牛、肉牛及び豚の3畜種に変わってきた。肉用牛飼養は、昭和45年度から米生産調整対策による牧草作付と平行し、乳用雄子牛の肥育素牛生産が始まり、その後、昭和50年から畜産基地建設事業によりアバディーンアンガス種の導入が図られ、53年度をもって建設事業は完了し、繁殖基礎雌牛1000頭構想の生産団地にする、と言う。畜産基地建設事業の内容は次の通りであった。

- (1) 草地造成：公共 346.4 ha、個戸 297.3 ha
- (2) 林間放牧地：公共 220 ha
- (3) 大規模繁殖農家（基礎牛70頭）：施設の建設<13戸>
- (4) 基礎牛の導入：輸入 760 頭、国内産 170 頭
- (5) 共同肥育施設の建設：収容規模 436 頭

以上の総事業費は25.9億円に達するが、国・道費の助成があって、地元の負担額は総計9.37億円程という。このように当生産団地づくりは、短期間に、しかも巨額の国家財政資金の集中的な投入によって建設されたものである。その生産団地の地区の肉用牛生産体系は図1の通りである。



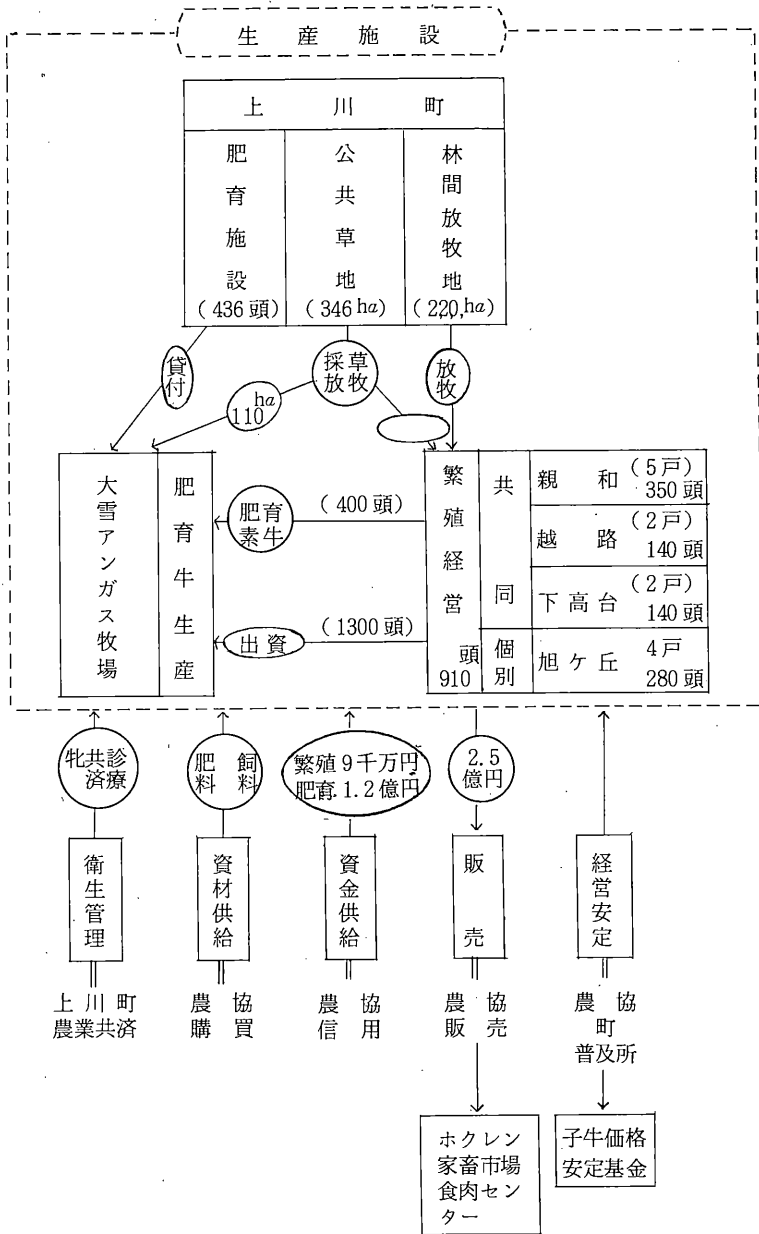


図-1 上川町の肉牛生産体系

図1の生産施設については、草地及び肥育施設は町が設け、繁殖施設は農家が設置した。町有施設のうち、肥育施設は繁殖農家が13戸によって結成された「大雪アンガス牧場」が運営にあたり、町が施設を貸付するという形をとっていた。繁殖農家13戸は1戸あたりの基礎牛は70頭の同じ規模であった。13戸のうち5戸が親和生産組合を組織し、350頭規模の完全共同経営をしており、越路と下高台の2地区でもそれぞれ140頭規模の2戸共同があり、70頭規模の個別経営は旭ヶ丘地区の4戸で、こ

こでも飼料生産は共同利用体制をとっているということであった。

牛の流れは、繁殖農家の生産子牛約 800 頭のうち去勢子牛は全頭を大雪アンガス牧場に出荷し、雌子牛は繁殖素牛として一般市場に出荷する計画であった。一方、このような生産条件を円滑化する機能として、衛生管理、資材供給、販売及び経営安定などについては、農協を中心とした既存事業の拡充という形で対応がなされていた。

アンガス種を導入した繁殖農家 7 戸の経営概況を表 1 に示した。

表 1 アンガス牛導入農家の経営概況

区 分		個 別 型				2 戸 共 同 型		5 戸 共 同 型
		1	2	3	4	5	6	7
労働	家族(人)	7	5	3	6	11	7	25
	労働力(人)	2.8	1.8	2.0	1.8	3.6	3.8	12.2
建設前農地	田	—	—	—	—	5.7	—	19.1
	畑	11.0	8.9	8.0	26.0	0.4	3.2	4.1
	山林・原野	22.1	26.9	14.7	37.0	10.6	55.7	11.0
	計 (ha)	33.1	35.8	22.7	63.0	16.7	58.9	34.2
建設後	草地造成(ha)	33.8	24.4	25.9	53.7	27.9	84.3	47.4
	収量 t/10a	4.0	4.0	4.0	4.0	5.0	4.0	5.0
アンガス導入	51 年 (頭)	50	—	—	—	—	—	150
	52 年 (〃)	—	50	50	50	—	105	100
	53 年 (〃)	20	20	20	20	140	35	100
	計 (〃)	70	70	70	70	140	140	350
建設形態		増 反	増 反	増 反	増 反	増 反	増 反	入 植
建設前資産	乳雄牛(頭)	4	34	46	32	187	6	(240)
	乳牛(〃)	22	—	—	—	—	31	—
	畜舎(m ²)	198	310	248	300	726	241	(961)
	トラクター(台)	1/4	1/4	1/4	1/4	2	2/3	(11/4)
	負債残(千円)	3,109	1,672	2,475	3,508	5,661	3,618	9,499

肉用牛の頭数規模は、本年度末で各経営とも大体目標を達成できるようであった。しかし、その規模及び形態は多種多様であって、アンガス種の繁殖部門に加えて乳用雄子牛の育成部門を抱えた複合形態をとっていた。

種雄牛の配置は、基礎牛70頭に貸付種雄牛1頭を原則とし、その交配は本交方式をとっていた。

肉用牛飼養の経験も浅く、基礎牛が初産牛であったことから分娩事故が多発していた。昭和52年12月から53年5月に至る子牛のへい死率は、各経営で26.8、10.5、15.2、及び18.9%といずれも極めて高く、その主因はほとんどが下痢症であるという。次いで分娩事故であった。

子牛の発育は、増体日量0.8kgを目標にしていたが、放牧時の授乳不足、放牧後期の放草不足などにより発育不良もでていたとのことであった。

飼料給与は、夏期間は全放牧とし、冬期間は舎飼であった。放牧期間は5月25日から10月31日まででの約160日間であり、この期間における濃厚飼料給与日量は、当才子牛には1日約1kg程度を給与するほかは、成牛及び育成牛ともに放牧のみであった。冬期間はヘイレージを基礎に濃厚飼料を全頭に給与し、その給与日量は1.2～1.4kg位とのことであった。

畜舎は、フリーストールバーンで運動場を併設していた。除ふん作業は、スクレッパーを用い、飼料給与は自動給飼機という極めて省力化をねらった設計で建設されていた。しかし、実際の運用には次のような問題点を生じているとのことであった。

- (1) ストール数が基礎牛70頭に対して不足であり、かつ全体が狭い。
- (2) 飼槽の巾が狭く、個体により採食差が出る。
- (3) 分娩房が狭く、かつ不足である。
- (4) 換気と舎内温度の調節が難しい。十分に換気すると、ふん尿は凍結し、スクレッパーは動かない。
- (5) 水道の凍結と水槽破損の発生。
- (6) 自動給飼機の部品が飼料搬送中に脱落した、などであった。

サイロは、いずれもスチールサイロではあるが、アンローダーの腐蝕が問題になっていた。また、ふん尿はスラリータンクに集積しているが、攪拌のための循環配管が悪くてスカムができ易いとか、冬期間には固くなり易いなどの問題点が出されていた。

飼料生産技術体系は、基地建設事業によって画一的に整備されたヘイレージ調整の大型機械化体系であった。

私達は、最後に基地建設事業のマスタープランに基づき、現在建設中の共同肥育施設を訪ねた。肥育事業の開始は、本年の11月から始まり、肥育素牛の年度内の購入は、繁殖農家から260頭、外部から100頭とのことであった。その運営上の問題点とか実態については、今後に残された。

9月7日、午前9時からホテル朝陽において、昨日見た肉用牛生産団地についての検討会が約40分程持たれた。その話題提供者は、農用地開発公団の進藤課長、上川町の役場及び農協の関係者3名であった。

以上のように上川町において、アバディーンアンガス種の肉用牛生産体制とそこでの生産経済の主体である繁殖農家と共同肥育施設について現地研究会が持たれた。施設は勿論いずれも未完成の段階で正確なことは解らないが、第1にこれで繁殖農家の採算がとれるのだろうか。第2に雌子牛の販路はなく、これも肥育をするのだろうか。第3に肥育施設と繁殖農家が共倒れになる危険性はどうか。など疑問を持ちながら、私は帰りのバスに乗った。

旭川駅に着いたのは、午後1時過ぎであり、ここで解散し、これですべての日程は終了した。